

[25年度] 德育推進 フォーラム

～德育で進める明るいまちづくり～

朝長 則男
佐世保市長

対
談

木村 勝彦
佐世保德育推進会議会長

なぜ今、德育か

会長 朝長市長が市長選挙の公約に掲げたことにより、佐世保市の德育は平成20年に佐世保市德育検討懇話会が設置され、その第一歩を印しました。これを発展させる形で、平成22年には佐世保市德育推進会議が発足し、この時は佐世保市の諮問委員会の位置付けで、私も委員の一人として参加しました。その活動を経て民間の運動に性格を移し、現在の佐世保德育推進会議となっています。

そのようなわけで、佐世保における德育推進は市長の思いに端を発しています。まず市長が德育を意識されたきっかけはどういうことだったのでしょうか。

市長 私が長崎県議会議員だった当時ですが、県で「心ねっこ運動」が始まりました。ところが3年目になると、議会の中で否定的な意見が出され、かなり議論をした覚えがあります。私としては、人の心の問題を施策として始めたのなら安易に止めるのではなく、幅を広げ、大々的に取り組んだ方がよいと働きかけ、廃止にならない動きをしました。

その経験から、市長選挙の立候補の際には、德育をマニフェストに掲げました。お陰様で当選すると、「德育はどうするんだ」と皆さんのが心配してくれます。「前例がない」という人もいましたが、「前例がなければ自分たちで作ればいいじゃないか」というわけで、静岡県袋井市が一つの方向性を示しており、参考にさせていただきました。それと同時に平田徳男先生の考えに強く惹かれていましたので、ご相談すれば何かいい方法論を出して下さるのではないかと、德育検討懇話会のメンバーに入っていただいたて、検討を進めていくことにしました。

德育は大事なことで、社会としても欲しているが、だれもそれを言いません。ちょうど「心の渴き」のようなものです。このような考え方と共に鳴をして下さる方がたくさんいらっしゃるだろうという思いで、現在に至っています。

会長 そうした社会の現状を踏まえて、市政の中に德育をどのように位置付けておられるのでしょうか。

市長 德を高めて行くことは、すべての市民の皆様が望まれることではないでしょうか。そういう意味で市役所の職員の皆さんには、チャレンジ(挑戦)、チェンジ(変革)、コミュニケーション(対話)の3Cを訴えています。特に三つ目のCのコミュニケーションは、德育との関わりがきわめて強いと思います。市民から信頼される職員像というのはやはり德のある人間であろうと思いますので、市役所の中でも一課一徳運動を行っているところです。

不道德と無道德

会長 德育というのは、知育・德育・体育という三つの教育の

要素の根幹であろうと思われますが、現代社会においては重要であるはずの德育が尊重されていません。市長はご自分が子どものころに比べ教育に大きな変化、世相の変化を、特に德育の観点から感じることはおありでしょうか。

市長 私は、小学生のころから長嶋さんや王さんにあこがれ、野球ばかりしていました。中学生になっても、体育の先生が野球の監督で相当に鍛えられましたが、その中で常に德を教えてもらっていたという気がします。そのころは「道徳」の授業が学校でやっと始まったか始まらないかということでしたが、「道徳」だけ取り出してうんぬんということではありませんでした。これは表現的にどうかと思いますが、戦前の教育を受けられた方々がまだ先生としていらっしゃった。また、社会の中にもそういう方がたくさんいらっしゃいましたから、地域社会の中でも自然に徳の問題を教えていただいたと感じがっています。我々の世代になってそうした先輩方の教えをきちんと受け止めず、次の世代に伝えられないことが問題なのだと思います。

会長 近年、「子どもの危機」ということが叫ばれています。つまり子どもが「不道徳」というのではなく、「無道徳」な子どもが生まれてきていると指摘されています。「不道徳」とは道徳があると前提したうえで、それに対して道徳的でないことをやってしまう、悪いことをしてしまうことです。それに対して「無道徳」というのはそもそも道徳的な感覚が欠如しており、道徳的な問題の必要性を認識していないことであります。こちらの方がより根の深い事態であると言えます。

そうした状況の中で、佐世保市の德育推進活動では、大人の德育における役割という問題に視点を移しています。子どもを有為な社会的成員として育て、確固たる人格として陶冶するというのが大人の役割ですが、市長のお考えはいかがでしょうか。

大人に德育が必要

市長 小学校の時には、道徳をある程度躰ののような形で「これはこうすべきである」と教えれば、素直に受け止めていたものが、中学校の頃からは忘れ去られる訳ではないにしても、德育についてはなおざりになってしまいがちです。

平田先生から教えていただいたことに、人間の徳を形成



する三つの習熟の時があります。一つ目は、頭では「わかる」ということで、これはみな中学生でも知っている。しかし、二つ目の「できる」になると、なかなかできる状態に至っていない人が多い。そして三つ目が「身に付く」ということで、この段階では何も言われなくとも、頭で考えなくとも自然とできるようになることを言います。

会長 私が先ほど「無道徳」ということをお話をしたのも、それはまったく道徳感覚がないということではなく、教えられない側面が強いと言えます。何を教えるのかというと、確固たる価値観、道徳的な規範意識が大人の側にあって、それを教えるのでなければならぬ。過去の日本の教養が理想的ということではないのですが、たとえば薩摩藩では郷中教育が行われていましたが、そこでは簡潔明瞭に「偽(うそ)をいうな」「負けるな」「弱いものをいじめるな」と、この三つだけを徹底して教え込みました。こういう教えを受けた子どもたちが大人になって、またその子どもたちに教えていくわけです。それから大河ドラマで話題になった会津日新館の「什の教え」なども非常に明確な規範意識であり、このように明確な価値観を教えることが、現代では家庭においても、地域においても不足しているのではないかと言われております。それについて市長は、どのようにお考えでしょうか。

市長 昔は、日本人のバックボーンになるものがあったのではないかでしょうか。それが今の時代は、コア(核)になるものが欠けている。会津の教えにしろ、薩摩の教えにしろ、大事なことを端的かつ明瞭に表していると思います。

マナー意識の希薄化

会長 こうしたコアになるような価値観の欠如が積み重ねられた結果、大人の問題として、現代社会の非常に憂うべき状況を生み出していると思われます。我を抑えようとか、縛ろうとかというのではなく、自分の思いのままに私利・私欲を優先させる人ばかりになっているのではないかでしょうか。

市長 私は人間社会ではルールを守っていくことが非常に大事だと思っています。多くのルールは、それを破っても罰せられません。それが社会的な慣習とか、マナーとかというものでしょうが、今日は、この罰せられないものについての意識が希薄になっていると思います。

会長 現在、日本中の大学で問題になっているのは授業中の「私語」です。私語するくらいなら授業に出なければいいではないかと思うのですが、出席点がほしいものだから皆出来ます。ところが最近、大学の私語がなくなったと先生たちが喜んでいたら、皆スマホやゲームをやっていたという笑い話のような状況があります。

学校は、社会の縮図だと言われます。学校の中で起きていることが、社会の中ではさらに倍加している。そうした中で、大人の徳育を推進するということには大きな困難を伴うと思うのですが、佐世保の徳育推進にあたって、市長は大人の徳育を重要な眼目として捉えていらっしゃいますね。

市長 学校で習ったことはキッチリ大人社会でもやるべきではないか、と言っています。大人社会をしっかり築きあげなくてはいけません。それが我々大人に課せられていることであって、「いや、それはなかなか難しい」と言ってしまえば、それで終わってしまいます。難しいからと言って動かなければ、何も始まりません。

そこで佐世保の場合は、徳育推進を地道であってもやり始め、やり続けることが将来につながっていくと思います。若い人たちが見習ってくれるように、次の世代の人たちに背中を見せなければいけません。しっかりとした背中を見せ、戦後失われたものを今の時代に取り返すために、しっかりとと考えて行動に移していくかなければなりません。だからこそ大人社会での徳育推進を推進すべきだと思います。

据える中で、子どものみならず、大人の徳育推進を図ることで、市長は佐世保市の徳育推進活動を展開するきっかけを作られました。佐世保市の徳育推進活動の現状と展望について市長はどのようにお考えでしょうか。

市長 非常に早いスピードで広がっていると思いますね。いろいろな団体、幼稚園、保育所、小学校はもとより、老人会、町内会などにも積極的に取り組んでいただいている。無論多少の温度差はあるかもしれません、「何とかしなければいけない」というような共通認識はできつつあるのかなと思います。

今後はマンネリ化しないように、皆様がどう続けていくのか、そういう気持ちをどのようにして持ち続けていられるのかを考えて行かなければならないと思います。いつもすべてが同じテーマ、同じスローガンというのではなく、徳目の類型というものを作りながらも、その中から自分たちに相応しいものを抽出していくことも一つの方法ではないでしょうか。いずれにしても一徳運動については、今は挨拶を中心でもいいのですが、これだけだと行き詰まると思いますので、挨拶だけでなくもっと幅広いものも徳目としてしっかりとお示しいただき、それを市民の皆様が選択していくということが必要だと思います。

会長 一徳運動の中で印象に残っているものがあれば、感想も交えてご紹介をお願いします。

市長 『広報させぼ』では、「徳育通信」を多くのみなさんに書いていただいている。これは非常に参考になると思います。これを材料にしながら、それぞれの団体、会社で取り上げていくことも一つの方法です。家庭においては、德育ノートを作っていくことが、自分の世代だけでなく、次の世代へのプレゼントでもあります。まとめて印刷をすれば済むことかもしれませんが、それでは心に残りません。自分の父母が毎回のりを付けて貼り、保存をしてくれたノートを引き継いでいく。その時にはわからないかもしれません、何年か後に「これは父から、母からいただいたもの。自分の生き方に芯を与えてくれるもの」と考えさせてくれるのではないかでしょうか。そういう活用をしていただければと思います。



徳育から見る佐世保市の未来像

会長 そうした徳育を推進することによって、市長の描かれる佐世保市の未来像とはどういうものでしょうか。佐世保をどのようなまちにしたいのかという、あるべき佐世保の未来像をお伺いしたいと思います。

市長 孔子の時代に『論語』が作されました。これは弟子たちの手によって作られたのですが、世の中が乱れていたので、これは何とかしなければいけないという思いで、孔子の教えを弟子たちがまとめて問答にしたのでしょう。他の時代でも、世の中は決して常に良い方向に進んでばかりいるわけではなかったのです。だからこそ、危機感を持って次世代にキッチリとした形で渡していかなければならぬ、その積み重ねが大事です。それを今やらなければいけないと強く思っています。

そして、私は徳とは「得」と考えています。一徳運動の徳ですが、そのような徳のある人間は信用される。会社にいても、社会にいても信用されます。徳を磨くということは自分を高めるということで、それが自分の財産となります。徳を磨いていれば、その会社の中で得になるのです。ですから、徳は得ということで私の話を収めさせて下さい。徳は自分を磨くことで、人のためにやることではないのです。そして、自分を磨くことで、社会のためにもなっていくことができるではないでしょうか。

徳育推進活動の現状と展望

会長 ただ今のお話のように、現代社会のさまざまな問題を見